

日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんどのごへんじ

兵衛志殿御返事

さんしょうしまこと

（三障四魔の事）

新版
1486
〜
1490

ひようえのさかんどのごへんじ

さんしやうしま

こと

兵衛志殿御返事（三障四魔の事）

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

いけがみむねなが

建治 3 年 ('77) 11 月 20 日

56 歳

池上宗長

夫ふたり

送

給

そうろう

かたがたのもの、ふ二人をもつておくりたびて候。そ

こころ

べんどの

おん

文

もう

そうろう

の心ざし、弁殿の御ふみに申すげに候。

おん

だいいち

だいいち

もう

そうろう

さては、なによりも御ために第一の大事を申し候なり。

しやうほう

ぞうほう

とき

よ

衰

しやうにん

けんじん

正法・像法の時は、世もいまだおとろえず、聖人・賢人も

続

う

そうら

てん

ひと

守

たま

まつぼう

つづき生まれ候いき。天も人をまぼり給いき。末法になり

そうら

ひと

貪

欲

漸

過

そうら

しゆ

しん

候えば、人のとんよく、ようやくすぎ候いて、主と臣と、

おや

こ

あに

おとうと

じようろん

隙

無

たにん

もう

親と子と、兄と弟と、諍論ひまなし。まして他人は申す

およ

てん

くに

捨

さんさいしちなん

に及ばず。これによりて天もその国をすつれば、三災七難、

ないしいち

に

さん

し

ご

ろく

しち

ひ

出

失

そうもく

枯

失

乃至一・二・三・四・五・六・七の日いでて、草木かれうせ、

しょうたいが

尽

だい

いち

炭

熾

たい

かい

油

油

小大河もつき、大地はすみのごとくおこり、大海はあぶらの

結

句

む

けん

じ

ごく

ほ

のお

出

か

み

ぼん

てん

ごとくになり、けつくは無間地獄より炎いでて、上梵天ま

かえんじゅうまん

体

出

漸

で火炎充滿すべし。これていのこといでんとて、ようやく

せけん

衰

そう

ろう

世間はおとろえ候なり。

みなひと

思

そう

ろう

ち

ち

こ

随

しん

き

み

適

皆人のおもいて候は、父には子したが、臣は君にかな

で

し

違

うん

ぬん

賢

ひと

卑

い、弟子は師にいすべからずと云々。かしこき人もいやし

もの

知

とん

よく

しん

に

ぐ

ち

もう

貪

欲

瞋

恚

愚

癡

と

申

き者もしれることなり。しかれども、貪欲・瞋恚・愚癡と申

酒 酔 しゅ てき おや 軽 し 侮
すさけにえいて、主に敵し、親をかるしめ、師をあなずる、

つねにみえて候。ただし師と主と親とに随つてあしきこ
そうろう
し しゅ おや したが 悪

と諫めば孝養となることは、さきの御ふみにかきつけて候
いさ こうよう
先 おん 文 書 付 そうろう

いしかば、つねに御らんあるべし。
ご 覧

ただし、このたび、えもんの志どのかさねて親の
右 衛 門 さかん 殿 重 おや

勘 当 殿 ごぜん もも
かんどうあり。とのの御前にこれにて申せしがごとく

「一定かんどうあるべし。ひようえの志殿おぼつかなし。
いちじよう
兵 衛 さかんの

御 前 おんこころ 得 もう そうろう
ごぜん、かまえて御心えあるべし」と申して候いしなり。

今度は、とのは一定おち給いぬとおぼうるなり。おち給わ
こんど いちじよう 墮 たま 覚 さま

もう

そうら

じごく

んをいかにと申すことは、ゆめゆめ候わず。ただし、地獄

にちれん 恨

たも

知 そうろう

せんねん

にて日蓮うらみ給うことなかれ。しり候まじきなり。千年

刈

萱

いちじ

灰

ひやくねん

こう

いちごん

破

のかるかやも一時にはいとなる。百年の功も一言にやぶれ

そうろう

ほう

理

候は、法のことわりなり。

左衛門

門

たいふどの

こんど

ほけきよう

敵

成

定

さえもんの大夫殿は今度、法華経のかたきになりさだま

たも

そうろう

右衛門

大夫

さかんの

こんど

り給うとみえて候。えもんのたゆうの志殿は今度、

ほけきよう

ぎようじや

そうら

殿

げんぜん

けい

法華経の行者になり候わんずらん。とのは現前の計なれ

おや

付

たま

物

狂

ひとびと

ば、親につき給わんずらん。ものぐるわしき人々は、これ

褒

そうろう

むねもり

しんぷにゆうどう

あくじ

したが

をほめ候べし。宗盛が親父入道の悪事に随つて

篠原

くびき

しげもり したが

さき し

しのわらにて頸を切られし、重盛が随わずして先に死せし、

おや こうじん

いずれか親の孝人なる。

ほけきよう

敵

おや したが

いちじよう

ぎようじゃ

あに

法華經のかたきになる親に随つて、一乗の行者なる兄

捨

おや こうよう

詮

一

筋

をすれば、親の孝養となりなんや。せんずるところ、ひとすじ

思

き

あに

おな

ぶつどう

成

たま

しんぷ

におもい切つて、兄と同じく仏道をなり給え。親父は

みようしようごんのう

きようだい

じようぞう

じようげん

むかし

妙莊嚴王のごとし、兄弟は浄蔵・浄眼なるべし。昔と

いま

ほけきよう

理

違

とうじ

今はかわるとも、法華經のことわりたがうべからず。当時も

むさしのにゆうどう

しよりよう

しよじゅうとう

とんせい

武蔵入道、そこばくの所領・所従等をすてて遁世あり。

和殿原

詔

こころ

薄

ましてわどのばらが、わずかのことをへつらいて、心うす

あくどう お にちれん たも
くて悪道に堕ちて、日蓮うらみさせ給うな。

こんど 殿 お 覚
かえすがえす、今度とのは堕つべしとおぼうるなり。こ

こころ
のほど心ざしありつるが、ひきかえて悪道に堕ち給わんこ

不 便 もう ひやく ひと せん ひと にちれん
とがふびんなれば申すなり。百に一つ、千に一つも日蓮が

ぎ 付 思 おや む 言 き たま おや
義につかんとおぼさば、親に向かつていい切り給え。「親な

したが そうろう ほけきよう おん 敵
ればいかにも順いまいらせ候べきが、法華経の御かたき

たま 付 ふこう み
になり給えば、つきまいらせては不孝の身となりぬべく

そうろう 捨 あに そうろう あに
候えば、すてまいらせて兄につき候なり。兄をすてら

そうら あに いちどう 思 もう き たま
れ候わば、兄と一同とおぼすべし」と申し切り給え。すこ

恐

こころ

しもおそるる心なかれ。

かこおんのんごう

ほけきよう

しん

成

過去遠々劫より法華經を信ぜしかども仏にならぬこと、

これなり。

潮

干

満

つき

い

入

なつ

あき

ふゆ

しおのひるとみつと、月の出ずるといると、夏と秋と、冬

はる

塚

かなら

そうい

ぼんぷ

ほとけ

と春とのさかいには、必ず相違することあり。凡夫の仏に

かなら

さんしようしま

もう

さわ

出

なる、またかくのごとし。必ず三障四魔と申す障りいでき

けんじゃ

ぐしや

しりぞ

たれば、賢者はよろこび愚者は退く、これなり。

もう

便

宜

思

このことは、わざとも申し、またびんぎにとおもいつる

おんつか

有

難

お

たも

おんつか

に、御使いにありがたし。堕ち給うならば、よもこの御使い

思おも 思おもう
はあらしとおもひ候さうらえば、もしやと申もうすなり。

ほとけ

そうろう

しゅみせん

針

立

か

仏になり候ことは、この須弥山にはりをたてて、彼の

しゅみせん

糸

放

直

針

須弥山よりいとはなちて、そのいとのおすぐにわたりてはり

穴

い

難

況

逆

おおかせ

吹

のあなに入るよりもかたし。いおうや、さかさまに大風のふ

向

難

きむかえたらんは、いよいよかたきことぞかし。

きよう

い

おくおくまんごう

ふかぎ

いた

とき

経に云わく「億々万劫より、不可議に至つて、時にいま

ほけきよう

き

う

おくおくまんごう

ふかぎ

いた

し、この法華経を聞くことを得。億々万劫より、不可議に至

しよぶつ せ せん

とき

きよう

と

ゆえ

つて、諸仏世尊は、時にこの経を説きたもう。この故に

ぎようじや

ほとけめつ

のち

きよう

き

行者は、仏滅して後において、かくのごとき経を聞いて、

ぎわく しょう

とううんぬん

きようもん

ほけきよう

疑惑を生ずることなかれ」等云々。この経文は法華経

にじゅうはつぽん

なか

殊

珍

じよほん

ほっしほん

二十八品の中にことにめずらし。序品より法師品にいたる

とうがく

いげにんてん

ししゆ

はちぶ

数

までは、等覚より已下人天・四衆・八部そのかずありしか

ほとけ

しやかによらいちぶつ

おも

軽

辺

ども、仏はただ釈迦如来一仏なり。重くてかるきへんもあ

ほうとうほん

ぞくろいほん

じゆうにほん

こと

おも

り。宝塔品より嘱累品にいたるまでの十二品は、殊に重き

なか

おも

ゆえ

しやかぶつ

みまえ

たほう

ほうとうゆげん

が中の重きなり。その故は、釈迦仏の御前に多宝の宝塔踊現

つき

まえ

ひ

い

じつぼう

しよぶつ

せり。月の前に日の出でたるがごとし。また十方の諸仏は

じゆげ

お

じつぼうせかい

そうもく

うえ

ひ

点

樹下に御わします。十方世界の草木の上に火をともしせるが

みまえ

撰

もん

ごとし。この御前にてせんぜられたる文なり。

ねはんぎよう

い

むかしむしゆむりようこう

このかた

つね

くのう

う

涅槃経に云わく「昔無数無量劫より来、常に苦悩を受

いちいち

しゆじよう

いつこう

なか

つ

み

ほね

おうしやじよう

く。一々の衆生、一劫の中に積むところの身の骨は王舎城

びふらせん

の

にゆうじゆう

しかい

みず

の毘富羅山のごとく、飲むところの乳汁は四海の水のご

み

い

ち

しかい

みず

おお

ふぼ

とく、身より出だすところの血は四海の水より多く、父母・

きようだい

さいし

けんぞく

みようじゆう

こつきゆう

い

なみだ

兄弟・妻子・眷属の命終に哭泣して出だすところの目涙

しだいかい

おお

ち

そうもく

つ

しすん

かずとり

は四大海より多し。地の草木を尽くして四寸の籌となす

ふぼ

つ

あた

うんぬん

きようもん

も、もって父母をばまた尽くすこと能わじ」云々。この経文

ほとけさいご

そうりん

もと

ふ

語

たま

みこと

は、仏最後に双林の本に臥してかたり給いし御言なり。

最

こころ

留

むりようこう

このかた

う

もつとも心をとどむべし。無量劫より已来、生むところの

父母は、十方世界の大地の草木を四寸に切つてあてかぞう

ともたるべからずと申す経文なり。

これらの父母にはあいしかども、法華経にはいまだあわ

ず。されば、父母はもうけやすし、法華経はあいがたし。今度

あいやすき父母のことばをそむきて、あいがたき法華経の

ともにはなれずば、我が身、仏になるのみならず、そむき

しおやをもみちびきなん。例せば、悉達太子は浄飯王の嫡子

なり。国をもゆずり、位にもつけんとおぼして、すでに御位

につけまいらせたりしを、御心をやぶりにて夜中城をにげ出

たま

ふこう

もの

恨

たま

でさせ給いしかば、不孝の者なりとうらみさせ給いしかど

ほとけ

成

たま

じょうぼんおう

まやぶにん

も、仏にならせ給いては、まず浄飯王・摩耶夫人をこそ

導

たま

みちびかせ給いしか。

親

よ

捨

ほとけ

成

もう

おやというおやの「世をすてて仏になれ」と申すおやは、

いちにん

寄

一人もなきなり。これは、とによせ、かくによせて、

和殿

原

じさい

ねんぶつしゃとう

作

墮

わどのばらを持斎・念仏者等がつくりおとさんために、お

勸

墮

やをすすめおとすなり。

りようかぼう

ひやくまんべん

なんぶつ

勸

ひとびと

うち

塞

両火房は百万反の念仏をすすめて人々の内をせきて、

ほけきよう

種

断

謀

聞

ごくらくじどの

法華経のたねをたたんとはかるときくなり。極楽寺殿はい

みじかりし人ぞかし。ひと 念仏者等ねんぶつしやとうにたばらかされて日蓮にちれんを

怨 たま わ み いちもんみな

あだませ給いしかば、我が身といい、その一門皆ほろびさ

たも 越 後 かみどのいちにん りようかぼう

せ給う。ただいまはえちこの守殿一人ばかりなり。両火房を

ごしんよう ひと ご 覧 名 越 いちもん

御信用ある人はいみじきと御らんあるか。なごえの一門の

ぜんかくじ ちようらくじ だいぶつでんた たま いちもん

善覚寺・長樂寺・大仏殿立てさせ給いて、その一門のなら

たも こうのとの にほんこく しゆ

せ給うことをみよ。また守殿は日本国の主にておわするが、

いちえんぶだい 敵 得 たま

一閻浮提のごとくなるかたきをえさせ給えり。

和 殿 あに 捨 跡 讓

わどの、兄をすてて、あにがあとをゆずられたりとも、

せんまんねん 栄 難 知

千万年のさかえかたかるべし。しらず、またわずかのほど

にや。いかんがこのよならんずらん。よくよくおもい切つ

いっこう

ごせ

恃

もう

て、一向に後世をたのまるべし。こう申すとも、いたずらの

文

思

書

物 憂

後

ふみなるべしとおもえば、かくもものうけれども、のちの

思

出

記

もう

きようきようきんげん

おもいでにしるし申すなり。恐々謹言。

じゅういちがつはつか

十一月二十日

にちれん

日蓮

かおう

花押

ひようえのさかんどのごへんじ
兵衛志殿御返事